

---

# マリオネットは納豆の糸で

弥招 栄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

マリオネットは納豆の糸で

### 【Zマーク】

N1095C

### 【作者名】

弥招 栄

### 【あらすじ】

恋つて、人を操り人形のようにしてしまふんだ  
「なにかっこつてんのよ、ぶあーか」ああ、じこつもう酔つてゐよ……

「なんでそんなもの頼むのよ。ぶあつかじやないのー?」「もちろん僕だってわかってるよ。"ばか"を"ぶあか"って発音する女、いや、男を含めたって、そんな奴いなってことは。わからないのは、なんで僕がそんな罵声を浴びせられないとならないのかってことだ……」

僕が頼んだのは、日本盛の熱燗一合徳利と揚げ出し豆腐、アボガドのサラダ、そして納豆巻き

「それよ!」

……へ?

「なんで納豆巻きなんか頼むのよ」

いや、まあ、ナマチュウを一杯飲んだだけで顔を真っ赤にしてわめいている彼女は、父方も母方も兄嫁さんさえも酒豪ぞろいの中で育つた僕にしたら、新鮮で、しかもとてもかわいくて、見てて飽きないのだけれども……

居酒屋で納豆巻きを頼むのに、それが食べたい以外のどんな理由が必要なのは、僕のほうが聞きたい。

「あんた、この店出たら、どうするつもじ?」

どうするつて、帰るよ。

「あたしの家まで、送つてくれるんでしょ?」

まあ、もう遅いしね。

「で、別れ際に、いつもみたいにおやすみのキスをするでしょ?」

そうそう、キスまで持つていいくのにどれだけ苦労したか……つて、そんなことをそんな大声で。

「そのキスが、納豆臭かつたらどうするのよー!」

臭かつたらつて……じゃあ、彼女が頼んだ二ラレバやらオーランサラダやら、ましてやにんにくの素揚げやらばらばらなるんだが。なによ。あたしの息が臭いっていうの?」「

そんな、滅相もない。僕は君の臭いが、訂正、匂いがとつても好きさ。

「……まあ、においはいいわ。あたしも納豆のにおいは嫌いじゃないし」

「うわ、照れてるよ、こいつ。かわいー。

「問題は、糸よ」

「へ？」

「キスをしたら、糸が引くのよ？」

「いや……」

「二人の唇と唇の間を、ネットって」

そんなことは……だつてまだ酒も飲むし、ここから彼女のワントンまで、歩いて二十分はかかるし。

「あたし、べたべたするのって、いやなの」

いつも寒いってしがみついてくるのは、誰だつけ？

「あたしは糸引かないわっ」

引かなくて幸いだよ。僕もそんなに物好きじゃない。

「でしょっ！？ 糸を引くなんて許せないわよねっ！」

「あー、はいはい。

結局僕が一合徳利を四本空ける間に、彼女はソルティ・ドッグとモスコミコールとスクリュードライバーと、あとはブラッディマリーを半分だけ飲んで、店を出た。

側溝に落ちかけて僕に引き止められたり、電柱にぶつかって一生懸命謝っているのは、やっぱりなにかのギャグのつもりなのだろうか。

彼女の鼻歌に合わせていろんな犬が遠吠えを繰り返すのは、結構近所迷惑なんだろうな、とは思うけど。

「おつ、『ぐるー』

それでも自分の家はわかつてゐらしく、見慣れた十階建てのマン

ショーンの前で、彼女はぐるりとターンを決めて敬礼した。

と思つたら、おとと、とよろける。僕はあわてて彼女を抱きとめ、

そのまま……

「ダメーっ……」

「え?

「なつとー

いや、そんな力ずくで振り払わなくとも。で、どうへーく?

「そこで待つてなさい」

はーい。

ポチの「ごとく立ち尽くす僕を置いて、彼女は小走りで少しおうりに走り回る。にあるサークルへ。あ、また看板にぶつかって謝つてるよ。何を買いに行つたのかな? もしかして、田ぐでぐるぐると丸めてあつて、ふうつて膨らませられる……

うーん。キスで明るい家族計画はないか。

お、帰ってきた。

「はい

なんだこれ?

「わかんない?」

そんな憐れむような目で見ないでくれよ。歯ブラシじゃないか。

「あんたのよ」

僕の?

「糸を引かないようにね。磨きなさい」

だつて、水もないのに。つていうか、糸は引かない

「仕方ないわね。いいわよ。洗面所、貸してあげるから。いや、だから……つて、え? 部屋に上げてくれるの?

「歯を磨くだけだからね」

はいはーい。

「ハイは一回でいいの」

「おお、彼女のにおいだ。

「洗面所はそこ。歯磨き粉は使っていいからね」

はーー。

「素直でよろしく」

大丈夫かな。ドアを頭突きで開けてつたぞ。

まあいいや。あいつの家だし、どぶにはまるることもないだろ。お

つ、コニシトバスじゅん。ここでシャワー浴びたりしてるんだ。

結構きれいにしてるな。

がらがらべつ。あー、すつきりした。これで糸は引かないぞつと。  
おーい、歯を磨いたよー。あれ、返事がない。

おーい。

そーっとドアを開けてみると、八畳のフローリングの一角を占めるベッドの上で、彼女は気持ちよさそうに寝息を立てていた。  
もこもことしたダウンを着たまま、片足をベッドからだらしなく落として。

ほのかに上気したままの頬。

しどけなく開いた、唇。

あー、もう我慢できない。

彼女の唇に、軽く、キス。

そして彼女は薄く目を開いた。

目にかかる前髪をかきあげて、僕の目をじっと見つめ  
再び目を閉じ、微笑んだ。

あれ？ 何かが僕の心に引っかかる。うーん、いいやつ。

もう一度、今度はついぱむよつなキス。もちろん、糸を引いたり  
なんかしない。だけど

僕はきつと、彼女にその糸で操られていたんだ。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1095c/>

---

マリオネットは納豆の糸で

2010年10月9日18時38分発行